

昭和13年10月1日（土）

諸報告物の為、頗る多忙。此日大体晴れ。寸暇なく報告物作成に力む。午後一時二十分出発。其れ以前、大尋（もずく）及び仙台より到来静子（すじこ）、風呂敷包みにて巖持来す。定時より三分遅れ発車。中尾氏より正午頃届きし手紙、車中にて読み、五時前五分到着。燈火管制。夜蚊帳吊らず、夜中蚊出て閉口せり。気温頗る上昇、裸体にて差支へなし。今朝中津にて痔出血、当惑せり。

昭和13年10月2日（日）

朝の間、晴れ曇り半ばす。澄久、興行物観覧。此朝、痔出血。余を困らす。午後降雨、半時驟雨の気味。気温依然暖かなり。三時頃、空中警戒警報発令。澄子四時帰宅。林檎20銭求めしむ。久子此日休暇。商店法昨日より発令の結果、本日の日曜、休業の商店多し。昨、柳原先生宅、第一土曜日なるも行かず。理髪して貰ふ。先日山崎君病気の際、真誌会合の席上、寄書きせられたるが、当時余欠席せしも其の話を聞き、詠みたる歌

君を欠く いませと祈る 姿こひ
けふの集ひの 友かえるなれ

昭和13年10月3日（月）

朝来降雨、終日。年金受取りに出掛けんとせしも、止めたり。手紙松木中尾、而して夜も、燈火管制中も歇まず降り続きたる為、投函せず。久子六時頃帰り、森永菓子持来る。余クリームの小さきもの一ヶ食べたるも、其の他は食はず。夜、素麺食ふて腹脹れ居たる為なり。

昭和13年10月4日（火）

朝来快晴。九時頃より曇り、十時頃より漸次霽れ。久子午後一時頃、腹痛の為帰宅。余午後0時40分頃、禪洗濯す。道子余の襯衣（はだぎ）類、洗濯し呉る。久子痛み甚だし。澄子揉みて遣るも治癒せず。遂に久子徒歩、道子に連れられて医師かかり行く。余、禪破れたるを修理す。天皇陛下には昨、軍人（遺家族を含む）に対する救恤（きゅうじゅつ）の思召しにより、三百万円御下賜（ごかし）。皇后陛下には下記御製を賜はる。此の旨、ラジオにて全国に放送せり。国民の感激は高調に達せるを思ふ。

天地の 神ともりませ かるつきに
いたてになやむ ますらおの身かな

昭和13年10月5日（水）

晴天。昨久子归来、猶痛みを訴ふ。暫くして平静に帰る。此の間、澄子等腹を揉む。此の朝ワイシャツ釦等、準備出来て居らず。開襟の儘着用。七時四十分出発。徒歩、駅に至れば八時。新聞を求め途中読む。出征軍人見送り婦人会員、各駅に堵列し居るを見る。殆ど定時到着。永江氏切手請求。五時過ぎ帰宅。子供等、戸外にて能く遊びたりとて喜んで居る。信子高笑いするようなれりと吹聴す。今の処、泣き方も信子の方激し。智子は割合に静かなり。風邪も猶、治癒し居らず。鼻カタルの模様なり。

昭和13年10月6日（木）

快晴。五時二十五分厠より出づれば、既に姉や仕事に着手し居る。八時五分出発。訂正物多し、悉く整理を了す。麻生局長臨局。牛乳本日より配達停止。巖も風邪、猶治

癒せざる如し。執拗なるかな。ラジオ日曜に持来たりし由なるも、其の後断線となる。新規購入を慫慂し、定価表を巖より受く。

昭和13年10月7日（金）

晴れ後曇り。訂正物多く午前中を費やせり。昨夜、痔出血少量。斯かる現象は珍らし。本朝注意したるが出血なかりし様なり。頃日別に飽食せず、何の故なるを知らず、神経に病まぬことに致し居れり。此の日も戸外は熱かりし如し。永江氏印紙請求。狩猟免許料拾五円に対する準備もあるらし。帰れば風呂沸く。巖子供二人を次々に入浴、和博悦子は愛子が入れてやる。余、巖の後より入浴す。此の夜、味噌代50銭愛子に渡す。九時四十分までラジオ聴取。巖横になると、余の前で眠る。

昭和13年10月8日（土）

晴れ。電為替300円を中津局発行の際、30円と誤記。当局払渡しの際も、其の儘30円として払渡しを了す。此日、中津局より電話照会。受取人より受領証提示。差額270円払い渡し計理方に付き、余中津局に行く。安藤氏より、小為替払渡し同様の方法に依り処理すればよしとあり。午後一時二十分まで、年金十一日受領証書に認印し、久子保険増額80銭と、年金132, 33の元金抛棄一年額拾貳円契約方、永江氏に委嘱す。百三十円は切手代より支出。尚ナショナルラジオ四球ペントードを、五十一円の一割五分引きを、月賦五ヶ月にて協会に請求す。五時帰福。水浴。

昭和13年10月9日（日）

晴れ次第に曇り。朝、禪洗濯す。矢部近來胃腸を害し居たるを感ず。昨夕一碗のみ、本朝も煮て食す。味噌此の朝で喰ひ盡くす。少々かびが生じて居たり。午前中秀夫子供二人連れ、妙子屋形原に兄の病氣見舞いに行きたりと。午餐うどん四を振舞ふ、二時頃歸る。夜甘蔗（かんしゃ）のみにて新しき味噌と共に食す。飯は食わず。電灯スタンド点火せず取調ぶ。故障箇所發見、修理完成せしむ。四時近く少雨、間もなく歇む。此の夜、久子販り遅し。蚊帳吊る。

昭和13年10月10日（月）

朝十時久子と出発。久子は簗島局に寄る。貯金の払戻しを請求したるにあらずや。余の年金受取を志したるが、如何なる行違いか認印見当たらず、局に遺忘したるものと見ゆ。取って置きの拾円を使用することにし、随って簗島局に用事なきに至る。岩田屋を一巡して、女中島子の為に久子より花飾り28求め、久子自身も求め、久子は森永へ余は玉屋に。而して玉屋にてワイシャツ3, 30求め、販途、県庁側の橋の広場にて、接合剤ストックライムセメントを、20にて求め帰宅。四時頃、巖よりの葉書。道子宛にて、島子の母堂病氣危篤の報あり。明朝出発せしむることとなれりとある。今日同女の為に土産品を求めたるも、籤をなしたるものか、曩に同女を当地に連れて来たるも、今に至りて良きことをしたりと思ひぬ。二郎へ返事発送。広美にも手紙書く。来たる十七日、県体育協会に於いて、銃後後援国民体位向上を期し、古処登山会を敢行することになり、当日午前七時迄に呉服町交叉点、日田行きバスに集合。七時半出発。バス代1, 25。コー

ス、九時秋月着。登山正午までに山頂着、中食。午後一時三十分山頂発。旧八丁超え、午後三時秋月着。直に出発。四時三十分呉服町着、解散。弁当水筒持参。主催局庁、社会教育課県体育協会。右申込み置きたり。蚊帳吊る、下にては吊らぬ。

昭和13年10月11日（火）

島子が出発するに、汽車の関係など如何にせしや、余が居れば時間を書きてやるのだがなど、心にかかること多かりしが、果たして夢に其の場面を見たり。朝より小雨そぼ降る。夕食後、顔剃り。澄子に手伝ふて貰ふ。久子六時飯る。終日降ったり歇んだり。手紙坂口、前田両氏に書き、五時半発送す。

昭和13年10月12日（水）

久子遅出。六時澄子起こす。昨夜風呂行きの際、歯磨き粉購はしむ。七時三十分仕度、道路泥濘、バス電車を利用す。駅にて新聞を求む。山村氏直方に行く。何分、女生徒多数乗車。上部に赴き同氏と行を共にし難かりし。直方は此日より祭典あり。定時より遅れて到着。降りそうな模様にて、遂に持堪（こた）ふ。五時帰れば、巖姉やに行かれて当惑の様子。道子等、中津転任を希望す。夜入浴。時は非常時、各自自誠して切り抜くべき場合、悲鳴を挙ぐべきに非ずと諭す。此日より飯一杯に制限す。

昭和13年10月13日（木）

台風は遂に九州を襲はざりし如く、方更を変じ支那に趨（はし）りしものか、蒸暑きこと甚だし。出征兵士の見送りに、是永氏駅に行く。曇天。便覧等訂正す。帰り悦

子連れ闇無浜神社に詣で戻る。夕食後、眠る前身体を拭ふ。水浴を希望せしも機会なかりし。九時半寢床。午後より雨模様。

昭和13年10月14日（金）

細雨、後歇みしも、和傘を持参す。五時頃より降り初む。其の前少しずつ降る。巖昨日より遅く戻る。此日、葉書運搬を依頼したるも未だ来たらず。余、帰り仕度を改め居たる際、帰宅す。僅かの違いにて葉書持込みたる由。夕方より愈々本降りとなる。永江氏の子供、昨学校にて病み、永江氏連れ戻り二階に休ます。余帰るさ元気を恢復、遊び居る。此日、猶咳嗽（がいそう）ありとて休ます。中尾氏より来翰。橋本氏妊孕（にんよう）の由。冷氣加わる、九時半ラジオ聞き、寢床。

昭和13年10月15日（土）

雨歇まず、和傘持ち長靴にて来る間もなく歇みぬ。注文のラジオ到着。昨、道子宛葉書にて、本日六時半到着。二名連れ行く旨通知す。ラジオは真空管のみ到着。永井逋相吹込み「逋信徒業員諸君に告ぐ」レコード一枚来。此日、柿坂局に整理区保険主任会開催。集配局のみにて希望あれば、無集配の参加差支えなしとのこと。職員調査票発送す。拾円即時払い回数乗車券を求む。為替の関係あり、午後三時十八分出発のこととしたり。午後二時半頃より仕度にかかり、着物や帯と二十分余かかる。守谷氏の計数不符合の為、気を揉ます。漸く間に合う。汽車五分遅る。此日込み合う。着駅後、電車及びバスに乗る。バスに乗換えの際、久子居る。終点にて逸早く通信の為、先駆す。夕飯に甘藷を食べ髯剃り、七時半出発。

八時着、四五人集合あり。三十四五の婦人の言なかなか辛辣なり。之に対し先生の答弁は実に我意を得たり。十時半閉会。家に帰りしに十一時を過ぐ。註・此日の柳原邸は日曜日のことに属す。此日至れば裏口に電燈なく人の気配なし。さては此日休みにてありつるか、玄関に音信ふ。中より学生らしき、洋服着けたる若者表はる。先生に伺ふて部屋に通す。四畳半の勉強部屋なり。憲法論の処なり。学生他に二名あり。是れ亦、余には有益なりし。戦争進展の趾を図面にて検討し、十時半辞去。

昭和13年10月16日（日）

曇ることありしも、概して晴れ。市内商店休業多く、玉屋其の他博多部、皆一斉に休業す。バスにて西中洲に至り、川端を通り松屋に至る。二時間余、爰（ここ）に居り、買物は届けて貰ふ。更に岩田屋を一階素通りして、北鉄電車にて太宰府行き。32銭づつ。太宰府を二時過ぎ出発。三時近く岩田屋にて飴、各20銭馳走。岩田屋を見て四時半、帰途に就く。五時半夕食。余は柳原先生かかり行く。先生議（はか）りて、十五日の例会を十六日として案内状発送されたる由。余は案内状を見ずして、昨出発したるもの。其の後の状況は前日の分に詳し。両女史は昨風呂に案内したるも、此日は案内せざるものの如し。

昭和13年10月17日（月）

神嘗祭。九時出発。荷物全部を携行、岩田屋に預け西公園に下車。水上公園を半週、西公園を一巡して玉屋に至り、昼食を各自の選定に任せ、支那料理40銭づつ。夫れより寿通りを経て、東公園より動物園を見、四時三十分天神町に来たり。荷物を岩田屋より受取り、博多駅

に至れば六時なり。猶岩田屋にて、夕食を七階食堂にて、好みに依り、洋食50銭を餐したり。六時三十八分発車。余は直に帰宅。萩の餅を造り居れり。夫れを食べ、渡辺通り星野先生邸に至る。集まる者九、午後十時十分閉会。松尾氏早く帰る。十時には閉会を企望する如し。此日、先生の咄なし。星野先生令夫人不在、忙しき如し。十一時半帰宅、二階に休む。連日の疲れ、眼に見えて感ず。新聞をも見ず眠る。

昭和13年10月18日（火）

午後一時、郵便局にて年金六円受取り、1,200光友会会費貯金。其の足にて山崎氏を見舞ふ。主治医井上氏の意見に任せ、高門医古賀病院に至りレントゲンにかかりたるに、癌との診断を受けたりと。昨、山崎氏の長男久雄氏、京大法科来春卒業の由。不図、星野先生に会いに見え、販りに其人に面会。初めて之を知る。然るに見舞いたるに病人らしき態度にあらず。恠（あや）しく帰宅。此の日早く寢床。新聞休み、数日分のも見ずして眠る。

昭和13年10月19日（水）

禪洗濯、晴天。午後一時まで新聞見る。此の間に於いても眠る。山崎氏を見舞ふ。桑原氏と坊さんとあり。桑原氏、操療治し居る。樋口医、見舞ひに来たり。序でに診て、癌を疑問視され小野寺内科にタクシーにて行かる。其の時四時を過ぐ。市場にて蒸しパン粉30、白玉粉19求め帰る。此日、靖国神社に陛下行幸。午前十時十五分、全国民一斉に黙祷一分間。九時寢床。此の朝珍しく五時過ぎ起床。澄子を起こしたり。久子早出。六時頃帰宅。森永メモ十冊持参。

昭和13年10月20日（木）

曇り。市会議員四十四名の選挙、当日外出せず。中尾氏返事出す。午後降雨。夜に入り道子等、湯に行く。昌江の病気模様を尋ね遣りたり。旅費あれば直に見舞ふ積もりなるが、夫れが無いのも佐世保行きを躊躇して居る原因なり。或いは夫れでよいのかも知れぬ。九時四十分寢床。

昭和13年10月21日（金）

北風猛烈、天気は雲を払って碧空を見る。台風、紀州沖500海里海上に在り。九州は圏外にあるらしきも、其の為、風強きものの如し。去る十二日、南支バイアス湾に突如敵前上陸の我軍は、此日午後三時三十分、広東を占領せり。上陸以来僅かに十日、驚異的進出として世界戦史に赫々（かくかく）たる光輝を放つもの。外国通信員も驚嘆し居る如し。此の日も外出せず。十時寢床。

昭和13年10月22日（土）

午前中晴れ、後曇り。広東陥落祝賀、色々の催し物あり。ラジオにて夜の番組を臨時変更し、永田秀治郎翁の講演及び歌謡曲等、何れも夫れに因（ちな）めるものを挿入せり。詩吟なども当意即妙のものあり。下帯修補す。蚊帳吊り居らず、一二匹居るらし。十時寢床。

昭和13年10月23日（日）

朝快晴。天気見込みも、ラジオは秋晴れを叫ぶ。然るに十時頃より曇り、降雨となる。乾し物、急に取込む。昨夜澄子に理髪し貰ふ。気温、稍下降。腹巻きを取出す。

午後より髯剃る。明日中津行きに対し、準備にかかる。足袋の必要あり。前年求めしビロードのを、持行くこととせり。久子早朝出勤。

昭和13年10月24日（月）

朝パンを食べて出掛く。当地に来る際は、天気朝の間不良に付き、長靴を穿いて出勤。其の儘出発したる為、元気良きも長靴にて發、十分前駅に到着。福日新聞四銭にて求め、中津着十一時三十五分。此日、新局舎修祓式挙行の由にて、十五日案内状に出欠の葉書添付しあり。此日十時の使いに対し遅れたる為、欠席せり。強いて酒飲を欲せざりし。ラジオ真空管なき儘となり居るに付き、福岡支店に催促せり。西牟田ひろ子氏より、福沢煎餅の寄贈あり。当地に来たるものの如し。中味は僅かに四十枚、内半数は局員に頒布す。残余は持販る。公債追加方電請す、行橋まで持込む約束なりと。五時帰宅。巖、迎えに悦子連れ来たり居る。着物を改め神社に、今度は和博を連れ巖を探す。販る途中、女中の問題を二郎の策と誤解し居る。島子よりの手紙を見るに及び、伯母なる人の策たるを知る。島子も狂言たるを知りつつ還る。頗る良心に咎めし如し。巖は此の手紙を見つつ誤解し居る態、誠に気の毒なり。勿論島子は伯母の虜となりて、東京に居ることを余儀なくされつつあり。尤も秋田には還りし如し。母の病氣も夫れらしき模様なしと云ふ、当然の帰趨なり。愛子と色々話し、新聞を見ることを得ず。九時半に至り、其の儘寢床。蚊帳は吊らず。

昭和13年10月25日（火）

晴天。昨より裕着用。一週間の整理を了す。五時販途に

就く。巖珍しく還り居らず。悦子を連れ途中まで迎ふ。行違いに販り居る。夕餉を済まし風呂沸き、巖の後より余入浴、悦子を入れ洗ひ呉る。巖は赤坊を入れ、愛子は和博を入れる。和博は食事中途に眠りたるを起こして入浴せしめたるもの。再び食を摂りたるようなり。此日午後三時三十分、漢口の一角を占領激戦中の報あり。号外発行。夜は可なり冷ゆ。九時四十分寢床。

昭和13年10月26日（水）

朝五時起床、愛子も同時起き出づ。可なり寒し。水浴、済まし体操着手。六時に十七分前なり。新聞珍しく六時前配達を受く。上着を被り出局す。日中温度上昇せず。給料支払ふ。永江氏保険募集に外勤。ラジオ球、送付越せし如く、案内状来着。故伏見宮博義王殿下御葬儀に付き、漢口陥落祝賀式は午後四時まで、屋外挙行は見合わすべしとの電牒あり。曩に漢口陥落の公報あらば、国旗掲揚、神社参拝記念式の挙行、旗、提灯、行列等の行事に付き、内閣情報部より申越せる趣を以て、庶務長より通牒あり。為替現金不符合の為、退局遅れ五時を過ぎたり。巖、余を待ち食事を摂らず。衣を更ふ。食事を摂る。九時五十分寢床。

昭和13年10月27日（木）

天気予報に反し、朝来快晴。中津新聞社より電話、分室竣工祝賀広告料2,500要求し来る。室内に入れ事情を懇示、撤回せしむ。ラジオ球送付し来る。組立取付を了す。松坂屋通信販売部宛て書籍注文、2,000送金。永江氏外勤。割合気温高し。昨10円巖に食費交付す。南京徐州、次いで広東漢口の占領に昂奮したる民人、国旗を掲

げて慶祝し、市内学校生徒の旗行列あり。ラジオは、零時30分の二ニュースより聞き得たり。照会文書に対し夫々片付けたり。一回掛棄てのもの、貸付金督促のもの等々、何れも懸案のものなり。午後六時三十分、大本営公報本。午後五時三十分、陸海軍協力、残敵を掃蕩して武漢三鎮を完全に攻略せりと。ラジオ放送、間もなくサイレン鳴り響く。恰度提灯行列中、各戸国旗を掲揚、慶祝の意を表す。九時二十分床展べ、四十分寢床。

昭和13年10月28日（金）

予報通り、曇り降雨模様。昨夜、保険申込み二件あり。予定数突破の成績を収むと。国債五百円の希望者あり。豊後町局に交渉、百円券と交換せり。守谷氏令兄、此日征途に就く由にて駅に送る。午前中二時間余かかる。五百円国債明日交付方、中津局に交渉回報を乞ふ旨、逓信局に電報す。代引き名宛て変更に対し、郵便物証書経過にて還付せり。交渉電報にて広島に発送。五時現金不符合、五時三十分となる。漢口陥落保険年金、責任数満了。祝意を表する為、五十銭菓子を買ふて局員を慰安す。余は其れまで待たず、帰途に就く。巖、朝吹氏の招待にて歌舞伎に案内され不在。十時寢床。

昭和13年10月29日（土）

五時より降雨。昌江への病氣見舞い、保命酒を余に渡す。出勤時ぽつぽつ降り居る。和傘は局に前週預け放し故、其の儘出発。中尾氏来翰。定時出発に際し頼まれし保命酒、忘れかけ帰宅すれば、甘藷煮て余の為に待居る。雨模様の促暮れる。午後九時過ぎ寢床。

昭和13年10月30日（日）

陽の射すこともありしも、八時頃より降雨。九時出発。佐世保に向かう時に豪雨、篠を束ねて下す勢いあり。箕島駅に向かう途中、和服の裾の方半分は濡れ鼠の如し。箕島駅に至れば、上りは今出発したるのみなりと云ふ。爰に裾を端折り爰まで来た以上、竹下駅の方が近いと意識し同地に向かう。処が佐世保行きは準急行とて、竹下を通過駅とし、見てるうちに通過し終わりぬ。次の列車は十時五十分後と見たるに、近眼の悲しさ十時二十余分を見誤り、一時間余、淋しい駅に待つことは感心せぬものあり。恰度雨も一時歇みたるを機とし出掛け、再び博多駅に向かう。二十余分着。此の時、既に列車は通過せり。博多駅にて初めて心付きたるが、羽織紐が見えぬ。何だか悪い予感を抱きたり。二時間遅れて、十一時過ぎ出発。三時二十分頃佐世保着。此の列車に平戸小学校の六年と高等科の女生が、前者が福岡、後者は霧島熊本に至り、佐賀より後者と一緒となる。色々土産物を取り出す。此の一行は有田駅にて乗換え、列車空明きとなる。定時着。バスにて常磐町まで10銭、其の一区域手前にて下車すれば、5銭にてよかりしと云ふ。直に三階に寝て居る昌江の部屋を訪ふ。起きて居る。顔色青白なるも想像の程瘠せて居らず。殊に食物は三度少量ながら摂取、嘔吐することなしと云ふ。咽頭癌は他の医師は断定し得ずと云ふ。胃癌と云ふも、潰瘍の一種なるやも知れぬと思ふ。別に痛むことなきも、食物の種類によりては痛むことありと。咽頭狭窄症とも覚えし。夕食を一緒にしたるが、副食物の如きは余より多く食ふ元気あり。文夫の浪費振りを話すを聞く。かかる息子を有するも、自分を反省する

必要を力説す。昌江より巖に、土産に水晶カフス釦、愛子に帯留め、前者1, 20、後者2, 00、更に久子にも2, 00の帯止めを呉る。余は櫛料として金3, 00、外に紫水晶の指輪一円を三個求め支払ふ。昌江は頗る経済上困難を感じ居るを見たる為なり。十時過ぎまで昌江妻女と話す。けい子と其の弟の尋二の二名が、後妻の子なり。何れも満足ならず。前者は肋膜炎、後者は学校嫌いとなり。近頃は登校せすと云ふ。無理に遣れば、途中で遊び居る如し。十一時、隣室に寝る。

昭和13年10月31日（月）

晴れ。朝まで殆ど眠れず、濃茶の祟りらし。七時過ぎ墓詣り、夫れより引返す。久夫伴ふ。久夫は常磐町青年会幹事長として、楽隊を率いて出征兵士の送迎をなしつつありと云ふ。今次ヒットラーユーゲントが長崎に来るを機とし、当市青年団も歓迎陣を布く為、同地に出発すと云ふ。稍得意に話しかく。八時出発、暇乞いす。湯呑み二個貰い来る。一時間相違し駅にて待居る。飯るさ久夫が余を送り、バス代切符五銭を四銭にて求められる由にて、路傍にて求め呉る。午後壺時過ぎ帰著。水浴、衣を更へ、午後三時郵便局に至り、年金を受取り6, 00、林檎を求めんとせしも、25銭四つと云ふに驚き、購はずして帰宅せり。此の夜、久子十一時頃飯る。余は早く寢床、冷氣を感ず。